

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：33905

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580068

研究課題名(和文)大陸を横断するオカルト

研究課題名(英文)Traveling Occult

研究代表者

廣島 佳代子(加瀬佳代子)(HIROSHIMA, Kayoko)

金城学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60535889

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本、中国、南アジア、オセアニアを対象に、本来目には見えない心的対象の可視化、言語化の過程を追った。「コミュニケーション」をキーワードに、言説空間に立ち上げられるオカルト空間を考察し、時間・空間を越える共通性を明らかにした。うち、日本を対象とする研究成果については、生成人類学会第10回国際学会(於金城学院大学2016年6月)において、「異界への扉ー日本の習俗と宗教」として発表した。「犠牲者」が可視化されるとき、それが神聖物語となるか、ルサンチマンの物語となるかは、その「犠牲者」の社会的位置と支配者の関係によることを示した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to demonstrate the way invisible entities such as ghosts, spirits, or life after death have been visualized in Japan, China, Southern Asia, and Oceania. We explored each occult discourse adopting “communication” as a key concept and discovered the similarity of their function or operation over space and time.

We conducted the research presentation “A Door to Another World: The Imagination in Japanese Folkways and Religion” at the 10th annual conference of the Generative Anthropological Society and Conference in June 2016. We discussed whether visualized “sacrifices” can narrate a sacred or a resentment story is determined by the relation between the “victim” and the ruler.

研究分野：比較文学

キーワード：オカルト

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「オカルト」言説の越境的かつ学際的考察を目的に始まった。

オカルト研究は数多くなされているが、そのほとんどが地域や専門分野という枠組みに基づいている。その意味において、オカルト研究は、ある種の膠着状況にあると考えられる。

例えば、オカルト研究といえば、日本では柳田国男の民俗学に始まる妖怪研究が想起され、妖怪をキーワードとする日本文化研究は今も盛んである。しかし、それら妖怪学ではヴィジュアルに重点が置かれ、言説は見落とされがちだといえる。そうした状況を打破し、新たな学術的展開をもたらしたいと考え、本プロジェクトを立ち上げた。

2. 研究の目的

上記のように、オカルト研究を地域、専門分野に閉じ込めず、学際的に展開することが、本研究の一つの目的である。もう一つ別の目的として、各地のオカルト言説の近代化を通して、その普遍性と特殊性のとらえ直しを企図した。

というのも、そもそも「オカルト」という概念は西洋由来のものであり、その概念が近代科学と足並みをそろえ、発展してきたことを考慮しなければならない。言い換えれば、近代化によって、各地の超常現象は「近代科学」言説、もしくは「オカルト」言説のいずれかに回収されたわけだ。

そうした前提から、本オカルト研究は二つの方向性を持って進めた。一つは、各地の恐怖/畏怖は「近代科学」言説もしくは「オカルト」言説にいかにか回収されたのか、その普遍的特性を探る。そして、もう一つは、両者の狭間に取り残され、どちらにも組み込まれることなく、生き残っている恐怖/畏怖をすくい上げることである。そうした、取りこぼされた恐怖/畏怖を「近代科学」言説「オカルト」言説と並べ置くことで、それぞれの特殊性、普遍性を探ることができると考えられる。

そのため、当然のことながら、本研究では「オカルト」と「近代」、「土着」と「近代」という対立項を固定的なものとはしない。その狭間で確認できる、複雑な相互作用を浮き彫りにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

前述のように、本研究は、従来の枠組みを超える学際的「オカルト」研究の理論構築と実践を行うものであり、本来目には見えないとされていた恐怖/畏怖の対象が言語化され、可視化されていった過程を追うものである。

そのため、文学、思想、美術史、文化人類学といった学術分野を横断する研究者チームを編成した。そうして、言説分析を中心としつつ、その言説を取り囲む絵画や人間の行為との関係性も視野に入れることを可能に

した。

さらに、各研究者が研究対象とする地域日本、中国、南アジア、オセアニアで確認できる恐怖/畏怖から、空間的・時間的枠組みを超えられる考察対象を選定し、その分節・接合を試みた。例えば、英語の「霊性 (spirituality)」がインドの現実とどのように接合されたのか、また、日本の「妖怪」が中国の現実といかに接合されたのか、といった超域的視座から分析を行った。

加えて、学術的、空間的、時間的横断を可能にするために、「コミュニケーション」を本研究の鍵概念として採用した。そして、本来目には見えないとされる恐怖/畏怖の対象が、言説上いかに操作され、変容、融合、そして伝播されていったのかを、各専門的眼差しから明らかにした。

例えば、日本においては、中世以降ヴィジュアル化が進むと、一定のイメージが付与された。また、近代科学の発展以降その言語化・可視化が加速的に進んだ。しかし、その過程で何かがこぼれ落ち、また、歪みやズレが加えられたと考えられる。

4. 研究成果

(1) 日本を対象とする通時的考察

中世日本における恐怖/畏怖の対象として、「妖怪」「鬼」という超現実的な存在が物語絵巻の内に確認できる。文字通り、そこで恐怖/畏怖の対象は「物語」を伴う絵画として可視化されていた。その「物語」の語り手は、例えば、歌占を行う巫女であり、物語中の人物を呼び寄せて問答を展開する彼女もまた、超現実的な存在であった。しかし、その「物語」は、西洋近代化を待つことなく、超現実的空間から現実的言説空間へと移されることになる。例えば、尾張徳川家は、妖怪退治の物語「酒呑童子」絵巻を、武家のルーツに関わる「神話」的要素をもつものとして扱った。

こうして、為政者は支配のために、恐怖/畏怖の「物語」を直接的に利用した。しかし、18世紀後半以後、日本知識人の間に現世主義が強まると、彼等は宗教忌避の態度を示し、無神論(無鬼論)者すら現れた。その傾向は19世紀以降も続き、今日に至る。しかし、こうした近代日本の思潮により排除された超越性や異界のイメージを再検討することで、今日的な宗教性の存在形態が見えてくる。

本来、日本では戦のあと、敵味方の区別なく死者の魂を祀っていた。なぜなら、これら祀られた魂が、災いではなく、福をもたらすと信じられていたからだ。しかし、近代日本の国家神道は、敵の魂を祀らなかった。徳川幕府の滅亡をもたらした戊辰戦争のあと、祀られたのは戦勝軍の戦死者だけで、敗軍の兵士たちの魂を、明治国家は無視したのである。言い換えると、明治国家は、見せしめのために敵対者の魂を排除することで、その命を天皇に捧げることを日本国民に奨励したので

ある。「無意味な死」という烙印を押されたこれらの魂は、不可視化されることで、明治国家の建設と維持に貢献したのだといえる。こうした魂の選別と排除が、近代天皇制イデオロギーというあらたな「物語」を紡いだのだ。

他方、こうした国家イデオロギーとは別のところに存在する恐怖/畏怖の一例として、女性の幽霊が挙げられる。『皿屋敷弁疑録』のお菊、『東海道四谷怪談』のお岩などは、日本型幽霊の代表例といえるだろう。これら幽霊は、江戸時代には浮世絵となり、可視化されたことで、その姿は広く人々に共有されてきた。日本型幽霊の典型となったお菊やお岩の「物語」は、主人と女中、すなわち階級格差およびジェンダー格差のルサンチマンが通底するものとなっている。すなわち、虐げられ続けてきた側からの反抗心は、支配の側に取り込まれることなく、いわゆる「都市伝説」というスタイルをとって語られ続けている。現在、日本各地の遊園地やアミューズメント施設において、お化け屋敷の見世物は大人気だ。暴力的な形で家に捧げられた供犠としての女が、守り神にならず怨霊になるというルサンチマンの物語は、未だに共感を持って人々に受容されているといえる。

(2) 日中の影響関係について

「妖怪」や「鬼」は日本と中国に共通する恐怖/畏怖である。そこで、柳田国男民俗学を手掛かりに、民俗語彙から民衆の観念や意識にアプローチすると、柳田の方言が周作人に与えた影響に行き着くことになる。

日本民俗学の創始者であると同時に日本方言学の父とも呼ばれる柳田は、方言研究の代表作『蝸牛考』を1930年に刊行した。「方言周圏論」の提起として有名なこの本は、1930年代以後の周作人に大きな影響を与え、周の方言理解を深化させたといえる。それ以前、周は民衆の言葉を「粗雑」ととらえていた。しかし、柳田の書を通して、民衆の生活実態を捕らえ直した周は、その中国民衆の言語活動を、心理反応の凝縮された表現手段としてとらえ直し、「妖怪」や「鬼」を見る彼等の眼差しをとらえ直した。

(3) 近代と土着の接触を通して

19世紀に「精神性のパラダイム」とされて以来、インドを精神性担当とする国際分業は継続中といえる。では、グローバル化が進行する今、その「精神性のパラダイム」はどのように刷新されているのか。Yann Martel, *Life of Pi* (2001)を通して分析した。

作者は、この小説を「神を信じなくなる物語」として開始すると、その物語をヒンドゥー教、キリスト教、イスラム教を同時に信仰するインド人パイに語らせる。そして、このPiの宗教的越境を支えるのがM. K. ガンディーだ。しかし物語の後半、非常事態下のPi

に非暴力と暴力の折り合いをつけるという課題が押し付けられる時、ガンディーの非暴力の限界が示されることになる。ガンディーはアイコンにすぎないというわけだ。そこで作者は、非暴力に代わる手段として、「想像力」と「語り/騙り」という新たな手段をPiに提示させる。

仏領ポリネシアでは、偶像ティキをめぐるコミュニケーション、とりわけ悪魔祓いとティキを模様とするイレズミの施術が重なる領域で交わされるコミュニケーションによって発動する、ポリネシア人の信仰について文化人類学的考察を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

加瀬佳代子、インドへの欲望、その「語り」と「騙り」 『パイの物語』を通して、比較文学、査読有、第59巻、2017、pp.14-20

桐原健真、The Birth of a Myth: Civil War and Sacrifice in Early Meiji Japan, *Anthropoetics*、査読無、Vol.22、2017、<http://anthropoetics.ucla.edu/ap2201/2201kirihara/>

龍澤彩、Mastering the Visualization of Heroic Narratives within Daimyō Families: The Illustrated Scroll of Shutendōji in the Edo period, *Anthropoetics*、査読無、Vol.22、2017、<http://anthropoetics.ucla.edu/ap2201/2201ryusawa/>

小松史生子、The Haunted Mansion and <Woman>: Otherworldly Apparitions in the Modern Cities of Japan, *Anthropoetics*、査読無、Vol.22、2017、<http://anthropoetics.ucla.edu/ap2201/2201komatsu/>

[学会発表](計3件)

桐原健真、The Birth of a Myth: Civil War and Sacrifice in Early Meiji Japan, The Generative Anthropology Society and Conference, 2016年6月19日於金城学院大学(名古屋市)

龍澤彩、Mastering the Visualization of Heroic Narratives within Daimyō Families: The Illustrated Scroll of Shutendōji in the Edo period, The Generative Anthropology Society and Conference, 2016年6月19日於金城学院大学(名古屋市)

小松史生子、The Haunted Mansion and

<Woman>: Otherworldly Apparitions in the Modern Cities of Japan, The Generative Anthropology Society and Conference, 2016年6月19日於金城学院大学（名古屋市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣島佳代子（加瀬佳代子）（HIROSHIMA, Kayoko）

金城学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60535889

(2) 研究分担者

龍澤彩（RYUSAWA, Aya）

金城学院大学・文学部・教授

研究者番号：00342676

王蘭（WANG, Lan）

佛教大学・公私立大学部局等・非常勤講師

研究者番号：10725659

桑原牧子（KUWAHARA, Makiko）

金城学院大学・文学部・准教授

研究者番号：20454332

小松史生子（KOMATSU, Shoko）

金城学院大学・文学部・教授

研究者番号：60350948

桐原健真（KIRIHARA, Kenshin）

金城学院大学・文学部・教授

研究者番号：70396414